

89 誌上発表 田村(津田)玄仙による学校設立の試み

加畑 聡子, 小曾戸 洋

北里大学東洋医学総合研究所

津田(田村)玄仙は(1737-1810)名は兼詮、積山と号す。長じて上総国馬籠の医家田村家に入り田村玄仙を名乗った。白河藩の侍医であった父玄琳より医学を学び、水戸の芦田松意に師事した後、京都の饗庭道庵の塾に入り、いわゆる後世派の医学を修めて大成した医者である。本発表では、玄仙が理想とした医学学校建学の趣意及び規則である『勸学治体』(1788序刊)を主な題材とし、その著述の背景、刊行の意図、教育内容に焦点をあてながら、玄仙の医学公教育形成の試みをみていく。

【『勸学治体』著述の背景】玄仙は、当時の「人倫ノ弊」(人間関係における倫理観の希薄さによる秩序の乱れ)と「医術ノ弊」(医学教育の未確立による医療水準の低下)とを憂慮し、人を教化し国の秩序を保つためには教育が有効であり、医療水準を上げるためにも学問の奨励が重要であると考え、医学教育のための学校規則及び教育指南書として『勸学治体』を著すに至った。さらに『療治茶談』三編(1784)にも、無知な初学者が横行する邪説に惑わされ、治療技術が拙いこと、経伎や儒学に偏った教育の迂遠さを憂慮して『勸学治体』著述したことが記されている。この書に従って、自ら20人ほどの学徒に教授したところ、3、4年で有為の材になったという。しかし、『勸学治体』自序に「於是本文所具論講堂之度、謀事於臭味、戮力於同好、稍稍有所營、亦唯天乎人乎。不日而廢矣。顧是千秋大業、雖非所輕易之可期、從來之丹心一朝為灰也」とあるように、一度は同志と共に学校を設立するも、瞬く間に灰と化してしまった。これは、同書の北羽秋田久城散人と称する秋木龍玄昌顕る者の序に「然塾之経営、書器之備、是乃千秋大業、自非仮力金穴篤愛之靈、豈簿産烏合輩所企及乎」とあることから、金銭的理由によるものと推測される。

【『勸学治体』刊行の意図】刊行の意図には、単に医学教育者向けの教育手法の啓蒙に留まらず、「今ノ時勢ヲ以テ其損益ノ処ヲ考フルニ、医塾ヲ設テ医学ヲ精勤サスル国益多キニハシカズ」(『勸学治体』)とあるように、為政者への嘆願があったと思われる。実際、高山彦九郎(1747-93)著『北行日記』寛政2年(1790)の記事には、当時の將軍輔佐であった松平定信に『勸学治体』を献上したことに対し、仕官の要請はあったものの、医学学校設立については、その後音沙汰がなかったことが記されている。玄仙の志願は、藩医としての地位と俸禄を得ることではなく、あくまでも初学者教育のための医学学校建設にあった。

【教育内容】平馬(「津田玄仙の理想とする漢方医学教育」, 1984)の報告の通り、「経伎寮」「方伎寮」「本草寮」「儒書寮」の四つの寮を教育の場としている。その中でも玄仙が肝要とする「方伎寮」では、九部の書(『傷寒論』『金匱要略』『脾胃論』『弁惑論』『医学入門』『婦人良方』『医方集解』『切要方義』『医鏡』『痘科鍵』)を、三年間の修学で暗誦できるように指南することを理想とする。また、『傷寒論』の項に「講師タル人才芸ニ誇リテ、鑿説或ハ空論ナド附会スベカラズ。近来ノ古方家ナドノ説、必ズ引キ合スヘカラズ。是人ヲ集メテ己ガ好事ノ朋トスルナリ。畢竟ノ処其人博覧ヲツトムル才器出ルニ及ンデハ、人ノ是非取捨ヲ俟ズメ、自ラ一種ノ帰依スル処生ズルモノナリ。ソレヲ此方ヨリ強テ勸メタルハ教授ノ法ニアラズ。」とあるように、講師は、近来の古方家などの説の引用を戒めると同時に、自らの帰依するものを学生に強制すべきでないとしている。私的な信条と医学教育とを区別するのは、師が掲げる信条に従って技術を体得するような従来の私塾とは、大きく異なる点であると言えよう。

玄仙の建学の志は社会的有用性に基づくものであり、その内容は初学者を対象とした客観的性格を帯びることから、江戸期における公教育性が見出せると考えられる。

本研究は、武田科学振興財団2013年度杏雨書屋研究奨励「江戸医学館を中心とした近世後期の医学公教育の形成」の一部である。